

近世村落構造の史的分析：諏訪領〔トチ〕木村の場合

著者	長谷川 丈世
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	10
ページ	137-141
発行年	1957-12-28
URL	http://hdl.handle.net/10114/11162

近世村落構造の史的分析

諏訪領芋木村の場合

長谷川丈世

はじめに

芋木村は、信州諏訪郡の東端現富士見町内の極めて起伏の多い高地（標高八〇〇〜一、〇〇〇米）を主体とした部落であり、近世初頭の高島藩の新田開発政策に伴い、木間村を親郷として生れた（入植は元和年代）一校郷新田村であり、慶安諏訪総検地に際して村高六八石余を以って帳分けされ、以後延宝、元祿、享保の各百姓改を通して、宝暦年間一二三石余に倍増し、幕末迄一三八石余の村高に規定された極めて弱小なる山村であるが、街道筋馬木宿金沢宿間之村としての性格より、延宝頃より、中馬等馬匹を中心とする経済事情を有し更に幕末にかけては産馬、馬市の主催村として親郷離脱運動の中核となり、安永四年、木間村に従う他の新田藩村を買ん出て村へと昇格した諏訪領唯一の新村でもあった。本稿は、右の親枝紛争を通して万延の小前騒動に言及した東大史料調査会の研究報告を基礎とし、主としてマキ同族団の形成過程を、宗門帳及び五人組帳を通して一側面を考察せんとしたものである。本文に入る前に、芋ノ木村残存宗門帳三五冊中完本の中から抽出した第一表に依り、問題点を探って見たい。第一に気付く事は寛文享保にかけての著しい人口の増大でありこれに伴い

第一表 芋木村宗門帳の分析

年 代	総人口	男	女	戸主数	夫婦組数	抱百姓	ふ代下人 下人	五人組人別数	五人組々数	均族構成 平家構成
寛文11	122	73	49	20	24	0	1	17	2	6.1
延宝 6	134	75	59	18	22	16	4	17	2	7.4
〃 8	144	79	65	17	26	10	5	17	2	8.4
享保 1	235	113	122	21	52	10	8	24	4	11.2
享和 2	187	100	87	30	43	0	0	24	4	6.2
天保 5	220	112	108	34	41	0	0	24	4	6.5
〃 10	210	107	103	46	37	0	0	44	9	4.3
慶応 3	193	100	93	50	33	0	0	44	9	3.8

夫婦組数の増加を見るに拘らず、戸主数及び五人組数がはば停滞している。この事は、一戸主包含の家族構成の増大、従って寛文当時の標準的単族構成から複家族構成への移行を示めし、

享保末から宝暦にかけて、特に著しく増加している事が見られる。（その最高は寛延四年瀬兵衛の三八名）これらの事情は、抱

百姓、下人の流入及び血縁家族の増加を伴う人口増大に即して考えねばならない問題であり単に下人労働を含めた大家族制の生成と見る事は出来ない。又安永期を境として天保十年に至る間の戸主数の増加と、五人組の増加に対比して考へると、前記享保く宝暦の間を通して、実質的分化がすでに行はれて居たものと見る事が出来、芋木村の村への昇格は、そうした実質的分化が、公的分化へと進む、最とも公然とした表現であつたと考えられる。この如き、人口増大く停滞く減少を通して、変質して来る身分關係を、主として血縁家族の増大から、公的分家及び実質的分家の性格を、五人組編成を通して明らかにしたい。

一

寛文から享保にかけての人口増加は、主として抱百姓、下人等非血縁者の流入に依つて開始されるが、狭少地味劣悪なる耕地を主体とする山村の性格から考へて、夫等は当然経済事情に即して考へられねばならない。わけても、抱百姓の流入は、寛文、延宝期以降では、明らかに凝制化し、抱主との地縁關係を基礎として、五く八年の帳付けの後、元禄く享保に至る間には、高請地を同じて独立するに到つており、又一方慶安以降は、近隣新田諸村の林立く確立期であり、對外關係をも含めて、耕地拡張、殊に水田経営への畑直切次は、一層困難なる事情を呈したものと考へられる。従つて頭初に投下された下人労働力が、よしんば切開きへの需要に供されたとは言え、加えて元禄以降の血縁家族の増大は、耕地を主体として見た場合の余剰労働力として考察されねばならない。石高を所持し、現物年貢を負担する高請百姓把握を基

第二表 血縁家族数の変動

年代	寛文11	〃12	〃13	延宝6	〃8	天和4	貞享2	元禄10	宝永3	〃6	享保元	〃9	延享4	宝暦6	明和3	安永3	享和2	天保5
1~5	8	8	8	6	6	6	5	2	3	0	3	2	7	7	6	6	15	19
6~10	10	10	12	10	7	9	9	7	7	10	11	11	6	7	5	3	10	9
11~15				2	4	2	3	5	6	4	5	6	1	3	6	2	5	3
16~20								1	1	2	3	4	1	3	1	2	0	5
21~25									1				1		1			
26~30														1		1		
31~35													1					
不明	2	2	1	0	0	0	0	4	2	4	0	0	5	1	2	7	0	0
計	20	20	21	18	17	17	17	19	20	20	22	23	23	22	21	21	30	34

(単位は戸)

本とする近世鄉村支配の中からは、芋木村の場合でも慶安元年一四、延宝元年一九、享保六年三三、宝暦五年五八名の高持百姓を分化し、従つて石高所持の全体的零細化の低流に、かかる余剰労働力を保持し得た要因に就いて考へねばならない。血縁家族の増加は、延宝以降の全体的な上昇に加えて元禄期には、著しく増大しており、内一六人以上の構成を持つ戸は、極く限られた戸に依つて、安永年間迄占められ、以後同年の『村』への取立を時点として急速に分解している。(第二表)更にこれを系譜的に見ると

C・D・J等三戸が、延宝ノ享保にかけて、村内の大口層を代表し、享保の九年間を境として、O・I・F三戸が、先記三戸の後退の上に更に一層拡大した大家族を有するに至っている。例えば慶安検地当時の屋敷持百姓であった瀬兵衛（三代目）の延享四年の家族構成三八名の内には、男子一四（下人一を含め一五歳以上）女子七（下女二を含め一五歳以上）の可能労働力数を見、内、弟今右衛門、治郎左衛門二名が、宝暦五年に名請百姓として帳付られている。（但し同年検地野帳不明確の為最小値）この如き一戸主包含の傍系血族が、内部的には、各戸で独立した形態のまま、又極めて狭少な農地を保持した一方では、『作馬ニ而中馬稼仕候』⁽⁴⁾とする駄賃稼、或いは『男女農業之間男は山稼藁細工仕女は木綿麻類少々宛手業仕候』⁽⁵⁾とする農間渡世に、従事したと考えられる。

二

以上見た如く血縁家族の増加に伴う村内の変動を、五人組人別帳を通じて側面から、考察して見よう。寛文十一年に於ける芋木村の五人組編成は、肝煎一名を際ぎ三組一六名編成であるが、次の延宝六年には、村役人四人が組外れとなり、数を減じて二組一三名に改編されている。この間新たに加入された者（寛文年代他村より引越参候者）二、欠落した者（戸主死亡一、抱百姓への転落一）二名の移動を除いて大局的な変動は行はれていない。然るに宝永三年に至る間には、在来の村役人層（終身世襲制）の移動が行はれた様であり、先ず元祿七年、庄屋A家が後退し、続いて元祿十年D家、宝永三年に至ってC家が後退し替ってF・Q・I三家が、村役人層を占めるに至っているが、元祿七、宝永三年に

独立した抱百姓二軒が新たに加わり、再び三組一六名に改編された他、内容的には、延宝期と、ほぼ変りない事を示めている。しかし宝永から享保にかけては、人口の増大を反映して、三組から、四組二〇軒へと拡大し、内容的には、これ迄とは異った様相を呈している。即ち、太郎左衛門を戸主とする血族関係の分化一分家であり、元祿二年に子長兵衛に相続すると同時に太郎左衛門の弟庄三郎を分家し、その庄三郎が又、享保四年次子久兵衛に相続すると共に長子曾兵衛を分家し（末子相続）結局宗門帳及び五人組帳を通して三血縁関係を形成するに至った。この如き公的分家は『村』へと昇格する安永年間迄、僅か三件（右の二件を含む）しか発生して居らず、そこに何等かの特殊な事情があると考えられるが詳細は不明である。そしてこうした公的分家が行はれた一方では、公的分家のないままに五人組帳を通してのみ、F家が、編成内に二つの位置（名主一、組頭一）を占むに至る。F家の村内での優越性の表現（先述）と、同時に、同一系列上（宗門帳）から二軒の五人組編成員を輩出する事は、彼等が同一系列中にあるつつ、すでに社会的に一軒前として認められた事を示めすと考えられ、その背景は経済事情、殊に現金収入を主体とする商品経済に立却すると考えられる。この事は、次の宝暦六年に至って著しい展開を見、同年の組編成に於けるIF家の地位は、極めて重要なものとなって来る。（第三表）即ちIは、年寄二名、組頭二名、計四名Fは組頭二名を輩出して、村上層部を形成しており従って先述の公的分家を行ったD分家二軒は、五人組編成の中から欠落を余儀なくされているのであり、公的に分家し得た家系よりも、一層強い経済力或いは村内規制力を彼等が保持し来った事情が考

第三表 五人組編成の変動

中馬四、馬喰馬一、作馬三(以上五軒) Fは中馬二、作馬一(二軒) Jが作馬六(三軒)を示めし、此等の馬匹所持を通じて、山稼、中馬稼及び、産馬に依る経済活動に従事していた事が知られる。	寛文11	C	EGH×FD	××××B	I J Q×A	
	延宝 6	ABCD	EFGHI JK	LMNOPQ		
	宝永 3	BIQF	LMSPB	ODGJH	ENKARS	
	享保 1	BICF	ODGJH	FMTDD	IQLPAE	NKRS
	宝暦 6	IIQE	FOGJH	INKVSD	IBMTX	ECP××
	享和 2	JVJO	ISLIB	FI××C	OTALE	EJEQM
	天保10	IFJD	JVOIX	D×DDF	LEE×O	EEUEM
		村役人層	III×I	QQQ×D	AJJ×E	FFDO×
			××DS			

(各プロック筆頭が組頭、×印不明)

えられる。従って先に見た血縁係系者の増加の背景と、かかる五人組構成の占める比重とは公的分家の持つ性格とは異った、同族的結合を示すものと考えられるのではあるまいか。そしてこの如き同族的結合は、元祿享保期を通じて形成されて来たと思われ、二年に於ける馬匹所持関係を見るに、村総計三五匹(中馬礼請六、馬喰馬二、作馬二七)の内、I同族団は

る。この如き同族団の形成は、安永四年を契機として、宗門帳での公的分家を通して組編成上に大きな変動を見せ、天保十年の五人組帳では、原則として相隣る五軒を以てする組編成が、宗門帳の不備を考慮に入れても、各同族団毎に編成されるに至るのであり、当時の製作と思われる村絵図に依っても明らかである。

この事は、元祿享保を始期とする同族的結合の強さを物語るものと考えられ、更に、夫等が、傍系血族の増大と云う宗門帳での表現を通し、特に流通経済を媒介として発展し来た所に、芋木村の街道筋村落としての意義が認められ、歴史的には、安永四年の親枝紛争の社会意識の中核になったものと考えられる。

むすび

本稿は、紙数の関係上、同族団形成の一側面を見たにとどまるが、この如き芋木村の村自体の中核を為す同族的結合と、村経済との関連に於いて、中期に頻発する山論、殊に釜無山入会紛争に一枝郷新田村としてどの様な主張を持ち、且つその事が、親郷離脱運動にどの様な性格を与えたかに就いては、尚多くの問題があり、今後の課題とするものである。が、芋木村が、地縁的にも、血縁的にも親郷木間村に従属しつつ元祿享保を通じて、頭初純農的(木間村)性格から、間宿たる神戸町の性格に近似してゆく事は、芋木村の一つの個性的条件になったものと考えられる。

終りに本調査に当って、本学板沢武雄教授はじめ富士見町々長樋口隆次氏、諏訪教育委員会細川隼人氏及び、文部省史料館浅井氏の懇切なる御指導を戴いた事を深く感謝するものである。

註(1) 東大史料調査会編『近世農村の構造』—信州諏訪郡富士

見、落合両村の歴史―

- (2) 細川隼人「諏訪藩の宗門帳」信濃九―七参照
- (3) 調査上の便宜の為、延宝六年の五人組編成の順列に従い
Aより記号し、その家系を示したものである。
- (4) 「芋木調査資料集」宝暦十三年「差上申一札之事」
- (5) 「同集」文化二年「村方明細帳」

- (6) 「同集」享和二年「村中馬数三歳より不残書記帳」(これは中馬惣代中に当てて出したものの控えである)
- (7) 「葛木宿金沢之間芋木村絵図」製作年代不明
他に特に註をしない史料は、芋木村有文書及び、文部省史料館所蔵の「芋木村宗門人別並五人組人別御帳」に依った。